「共同研究事業」成果報告書

子どもの主体性を尊重する学級づくり・学級経営の実践
―初任教員の実践検討と教師の成長を中心に―

研究代表者　船越　勝　（和歌山大学教育学部）
共同研究者　山根木瑛亮（和歌山市立浜宮小学校）
中川　拓大（貝塚市立中央小学校）
江頭　尚寛（和歌山市立鳴滝小学校）

一　研究の目的とプロジェクトの活動

子どもの主体性を尊重する学級づくりと学級経営をテーマにして、毎回報告者を決めて、各クラスの実践を持ち寄り、どのようにこうした自主的・自治的な学級像に近づけていくことができるか、実践交流を進めながら、共同研究を進めていった。今年度は、初任の教師の実践を報告してもらうことにし、初任者研修や職場でのOJTでの学びとともに、大学時代の同期のゼミメンバーと学部時代からつながりのゼミの先輩による集団での学び合いが、初任の教師の学びと成長をどのように支えていくか検討を試みた。また、プロジェクトの研究会は、毎回１０名前後の参加で、発表者の実践の報告と検討（カンファレンス）、若手の教師の実践の悩みの相談も対応するとともに、参加者が持参した教材やノート、学級通信などの交流も行った。（船越）

二　初任の教師の実践報告とコメント

１．Ｙ先生の実践報告

２０２３年の春に大学を卒業し、教員１年目として那賀地方の小学校に勤めることとなった。この小学校は全校児童が６０名強と小規模な学校で、私が担任することになった４年生は９名である(２学期からは、１名が転校したことにより８名となる)。教室で子どもたちと出会ったときに抱いた第一印象は「できる子たちだ」というものだったが、彼らと過ごしていくうちに、私は彼らが抱える大きな課題に気づいていくのである。以下からは、子どもたちの詳細な様子とそこから見えてくる課題について述べていく。

私が課題だと考えたのは、大きく２つである。１つ目に「国語力の低さ」が挙げられる。他者の言動の意味や意図、感情を上手く理解できず、合わせて自身の伝えたい事柄や感情を適切に表現できない子どもが多かった。もう少し具体化すると、まずこちらの指示や説明がさっぱり通らないのである。全くもって難しいことを言っていないはずなのに、「どういうこと？」「分からん！」の大合唱が始まるのである。また、友だちの言動を曲解して受け止めることによって、トラブルが頻発した。事実確認をしようとしても、「言った」「言ってない」の水掛け論が始まり、お互いの思いを正しく受け止め合うことができないため、解決に難儀した。さらに、日常的な会話においても、主語の抜けなどが酷く、いきなり「先生、行ってきたんよ！」と話しかけられ、「どこに？」と問い返しても、「分からん！」とか「なんで分かってくれへんの！」と言われてしまうのが常であった。

こうしたことが起きるのは、彼らの国語力が低いからだと私は考えた。自己や他者を適切に理解するには国語力が必要不可欠である。例えば、楽しいや悲しいという感情は、楽しい、悲しいという言葉があって初めて認識できるのであって、その語彙を持ち合わせていない場合、心の中にある何かを理解できない。同じように、他者の言動の意味や意図や感情、また自身の伝えたい事柄は、自身の中で上手く言語化できないと適切に処理することができないのである。国語力、つまり必要な語彙を獲得させること、そして他者について考え想像する力・自己を表現する力を育てることが課題だと考えたのである。

２つ目に「主体性の低さ」が挙げられる。彼らの主体性の低さに気づいたのは、クラス内での誕生日会を計画しようとしたときである。私が「時間は取ってあげるから、みんなで計画するんだよ」と伝えると、「えっ、先生がやってくれへんの？」と返ってきたのである。どうやら今までは、教師が活動の全てを計画し、子どもたちはただただそれに従ってきただけのようである。

上のような受動的な態度は、誕生日会の計画のみならず、学校生活の様々な場面で見られた。主体性は、変化の激しい時代の中で必ず求められる力だ(月並みな表現だが…)と私は考えている。主体的に活動できる場を設定し、そこで成功体験を積ませ、自分たちで何かをつくり上げることの楽しさや喜びを体感させることが必要だと考えた。

以上のような課題に対して私が取り組んだのは、国語、特に文学の授業に力を入れること、生活綴方、会社活動の３つである。前の２つは「国語力の低さ」に対応したもの、会社活動は「主体性の低さ」に対応したもので

ある。まず、文学の授業に力を入れたことについて述べる。授業では、一文・一語・一字にまでこだわらせながら、物語を読ませることにした。これは、単純に語彙の獲得に繋がる。言動や感情を表す言葉を、物語を深く読ませることによって獲得させていった。また、登場人物の言動や気持ちの変化について、さらには叙述の意味、意図について発問し、自分の思いや考えを書く時間を十分に確保した上で、徹底的に考えさせた。自己を表現する訓練である。そして、私が一番重視したのは、話す・聞くにあたる話し合い活動である。自己を表現する上で、他者に伝えるための論理的説明力を鍛える訓練である。たびたび、適切に伝えるための必要な言葉が抜け落ちたり、曖昧な言葉だったりするので、「誰が？」「何が？」「それはどういうこと？」などと徹底して問い返した。また、子どもたちは往々にしてテキストを無視した、根拠や理由のない意見を言うので、「そう思う・そう考えるのはなぜ？」「それはどこから読み取ったの？」「そう書いてあるから、つまりあなたはどう考えるの？」と問うた。私がしつこく聞くものだから、子どもたちは四苦八苦しながらも、なんとか言葉を紡ぎ出していった。このような授業を続けていくうちに、子どもたちは少しずつ言葉を獲得していった。論理的な文章も書ける・話せるようになっていき、話し合い活動が活発になっていっただけでなく、日常会話も豊かなものとなっていった。また、国語力の低さによるトラブルも減少傾向となった。そして、この国語力の向上は、次に紹介する生活綴方にも影響してくる。

私は大学時代から生活綴方の力に魅了されており、子どもたちにはよく日記や作文を書かせるようにしている。宿題として出すこともあるが、いつでも書いて良いことにしていて、テーマも字数の制限もなし、多少の言葉の乱れも気にしないというスタンスで取り組んでいる。そのおかげか、私のチェックが間に合わなくなるぐらいに、子どもたちは日記や作文を書いて持ってくる。自身をありのままに表現している姿は、子どものかわいさを感じる瞬間だ。そして、それらをクラスのみんなで読み合い、書き手の思いに共感したり、その人の理解を深めたりする。これらの活動も国語力の向上に役立っていると私は感じている。 生活綴方に関連して、１２月にこんなできごとがあった。ある大きなトラブルが起きたので、その問題について学級全体で考えることになった。その一環で、自身の気持ちを書かせることをしたのだが、明らかに自分を表現する言葉の幅が広がっていたのだった。みんなでそれらを読み合い、子どもたちも私も涙ながらに本音を語り合った。生活綴方を通じて、私たちは相互に理解を深め合ったのだった。

最後に、会社活動について紹介する。会社活動とは、日直や当番とは違うもので、あったら学級のためになると思う活動を子どもたちが考えて、主体的に実行していく実践のことをいう。主体性の低さが見られたこのクラスでは、まず、自分たちで何かをするという場をつくってやる必要があった。その意味で、会社活動はうってつけだと考えたのである。いきなり、やったこともないようなことをさせるので、上手くいくか心配していたのだが、意外にも子どもたちは創造的に取り組み、１学期には７つの会社が設立された。会社が設立されてからは、週に２、３回は何かしらの活動が行われ、クラス内に活気があふれた。２学期末には、子どもたちから会社の発表会をする時間が欲しいと言われ、４５分間を彼らに任せた。自分たちだけで会を進行し、とても楽しい１時間をつくり上げた。子どもたちに主体性が育まれてきたのを感じた瞬間であった。

７月に私の拙い実践について、教授やベテランの先生方に聞いていただく機会を得た。貴重な意見をたくさんいただき、まだまだ改善の余地がある実践だと感じた。実践を探究していく行為はとても楽しい。その楽しさを原動力として、これからもより良い学級づくりをしていきたいと考えている。(Y)

２．Y 先生の実践へのコメント

Y 先生は、私のクラスに入って教育実習を行ったときから、国語科の学習、特に文学作品の読み取りに重きを置いて授業づくりに取り組んでいた。今回の報告を読ませてもらう中で、当時の取組が思い起こされる。文学作品の読み取りでは、登場人物の気持ちの変化を捉えながら、物語を読み進めていく。学習指導要領にもあるように、気持ちの変化を捉えるためには、登場人物の行動の背景を理解する必要があり、人物の行動や会話、地の文などの叙述を基に捉えることが求められる。また、気持ちの変化を想像する根拠となる、複数の叙述を結びつけながら読むことで、より具体的に気持ちを想像することができる。Y 先生が行われている丁寧な文学指導が、子どもたちに「言葉」の獲得の機会を与え、自身の思いや相手の気持ちを理解する手立ての一つにつながっていることは言うまでもなく、文学的な文章の読解の積み重ねから、相手の行動の意図や気持ちを考えようとする態度を育んだといえるのではないかと考える。普段の生活綴方の実践や、話し合い活動を重視した学習形態など、どの教科の学習においても、言語活動を重視した指導を行われていることは容易に想像できる。相手を知ることが、他者理解の第一歩になると思うので、獲得した言葉で自分の思いを表現し、相手の考えを受け入れるという経験を、これからも多く積ませていってほしいと思う。

子どもたちの主体性という観点においては、特別活動における係活動、ここでいう会社活動は、良い影響を与

えると私も考えている。コロナ禍の休校からスタートした今の４年生は、人との関わりはほぼ遮断され、自発的・自主的な行動が大きく制限される中で学校生活を送ってきている。そのため主体性が育まれにくいという状況があったのは確かである。そんな中で、子どもたちが活躍する場を設定するのは教師の仕事であり、自分たちの学級をよりよくするために小集団で取り組む係活動の場は、主体性を育む上で非常に重要となる。子どもたちに戸惑いもあったようだが、「なすことによって学ぶ」という特別活動の基本原理にあるように、試行錯誤しながら取り組んだことで、創造的な取組につながったのだと思う。日々の成功体験の積み重ねにより、子どもたちにより一層の主体性が育まれていくことを、私も願っている。（山根木）

３．S 先生の実践報告

（1）自己紹介と学校紹介

伊都地方の小学校２年生 13 名（支援学級１名）の担任をしている。この小学校は全校児童 60 名の小さな学校で、3・4 年生は複式学級である。2 年後には単学級 2 クラス、複式学級が 2 クラスになる。

（2）実践と子どもの様子

〇学級会

大学時代に学級会の取り組み方を少し勉強していたことから、低学年でも少しずつ自分たちで話し合って計画し、実践、振り返りという流れを取り入れて行きたいと考えていた。4 月当初、児童たちに学級会で何をしていたか尋ねると、「1 年生の時の学級会はドッジボールしていた。」との回答であった。昨年の担任に話を聞くと、1 年生前半は話し合いが行なわれていたが、後半は基本ドッジボールをしていたようだった。児童の声に流され、すぐに理想とする学級会の形を進めることができず、2 年生の 1 学期の学級会では、会社活動の担当の児童がドッジボールの種類を決めて遊んだ。

10 月頃、紀の川市立川原小学校の 2・3 年生複式の学級会を参観させていただく機会があった。その際に恥ずかしながらほぼ初めて特別活動の指導案を読んだ。実際に計画を立て、実践し、振り返る一連の流れを見ることができた。3 年生を中心にして、児童たちが楽しみながら活動を進めている姿を見て、目指すべき学級会の姿を再確認することができた。2 学期からは川原小学校の実践を参考に、席をコの字にし、学級委員は前で司会を担当することにした。自分たちで話し合って計画し、実践・ふりかえりを行う流れを少しずつ定着できてきている。

〇トラブルが起きたとき

トラブルが起きた時、特に低学年は、「ごめんね」「いいよ」でトラブルを解決しがちであるが、私は、「ごめんね」は強制せず、自分の非を相手に伝える手段の一つとして使うように 4 月から意識している。最後は、関係した子ども全員に「もうモヤモヤしていることはない？」と尋ねることで、トラブルが起きたその日のうちに子どもたちが納得して帰れるように努めてきた。場合に応じて全体で話し合うのか、個人で話を聞くのかどちらが適切なのかも考えるようにしている。

〇図工

担任している 2 年生は絵を描くことが大好きな児童が多く、図工の時間は楽しんで取り組んでくれている。最初は図工の教科書内容に加えて、国語科「スイミー」「ミリーのすていなぼうし」を題材にし、好きな場面や自分の好きなぼうしを描く活動を取り入れた。自由に発想することが好きな児童はすぐに取り組めていたが、「何を描けばいいのか・何を作ればいいのか分からない」という児童も見られた。そこで他の先生方に相談し、打率 10 割達成を目指す『酒井式描画指導法』を進めていただいた。酒井式描画指導法では全員同じペースで丁寧に指導する。実際に取り入れてみると、同じ条件でも子どもによって個性が出る作品ができあがった。その一方で、先生が想定した絵を描かせるために、子どもに指示を与えて「描かせる」方法という見方もある。今後は全員が楽しんで取り組めるように、教科書内容に加えて酒井式も教材研究に取り入れていきたい。

〇漢字指導

国語を指導してくださる先生から「漢字は早く終わらせた方がいい。」とアドバイスを常々いただいていたことから、毎日 4 つ新しい漢字を全体で学習し、10 月中に 2 年生で学習する漢字 160 字の学習を終了した。しかし、授業で学習して宿題で何度も書かされただけでは習得できない児童が多かった。漢字指導について悩んでいたところ、『漢字指導法・学習活動アイデア＆指導技術-』を進めてくださった。 ①「読むこと」で漢字に見慣れる、②空書きで書けなかった漢字だけを漢字ドリルに練習の 2 点を取り入れることで、読める漢字が格段に増えてい

ったように感じる。しかし、読めても「書ける」ことはハードルが高く、より良い漢字指導を模索していく必要があると考えている。

○「13 人、全員個性的」

4 月当初「このクラスは元気な子が多いよ！」という声がとても印象に残っている。子どもたちのことを全く知らない状態で、学級開きでは「自分らしく」「おもいっきり楽しむ」「あたたかく」の 3 点を伝えた。ここまで子どもたちと過ごしてきて、13 人全員個性が強く、明るく元気な児童ばかりで、まさに「元気な子」ばかりの集まりであることをつくづく感じている。そんな 2 年生に対して、夏休み明け・2 学期から大切にしていることは「メリハリ」「人の話を最後まで聞く」という 2 点である。休憩時間、元気に外に遊びに行くことは良いが、授業時間に間に合わない、人の話を聞かず、自分の話を授業中にし始める、など、素敵な 3 年生になるために改善すべき点を伝えている。

★着目児（A）

学習面では、単語の意味が分かっていないため、特に国語のテストで文の途中から抜き出す。さらに、漢字・九九がまったく覚えられない。学習が追いついていないから宿題ができない、できても学習に対する意識が低いため、やってこない、そんな児童である。学習への意識はとても低く、一桁のテストの点数を見せても問題視していない。行動面では、友だちの言動をまねしたり、トラブルになっても自分の言動を覚えていない、相手の気持ちを理解できないなどの点が見られる。そのことから、周囲からは「A に言われたくない。」と同じことをしてもきつく注意されることが多く、特に男子からの当たりが強い。

A は普段から些細なことで「いじめられた。」と訴えにくることが多かった。いじめアンケートでは「いじめられている」と回答し、その都度話を聞いた。しかし、嫌なことがあったという記憶だけあり、詳細をあまり覚えていなかったり、A に非があったりすることもあった。夏休み前から、分からないことを教えてくれる友だちができ、周囲に自分のことを理解してくれる人が現れたということの影響は大きかったのか、「いじめられた」という訴えは激減した。

どのように学力を上げていくのか、そもそも学習に対する意欲をどのように継続していくのか、また、男子たちとの関係改善など、今後取り組んでいかなければならないことは山積みである。今年度中に解決を目指すのではなく、次年度でも引き継ぎし、6 年間通して A をサポートしていくことが大切である。（S）

４．S 先生の実践へのコメント

S 先生は、ゼミ生時代から子どもの自主性を尊重する教育を志向していて、卒業論文は大型動物を学習材にした総合学習で有名な長野県の伊那小学校の総合活動・総合学習の 50 年近くの実践の発展を分析した大作であった。現任校に着任して、１３人の２年生を担任することになったが、１学期は初めての教師生活で、毎日大変だと悩みを述べていた。しかし、２学期に入ってからは、仕事にも慣れ、毎日楽しく充実しているようである。着目児の理解に表れているように、１３人の子どもの個性を深く理解しようとしているのは学級づくりや学級経営において大切なことであり、こうした個への着目は、トラブル対応の場面での「ごめんね」で済ませる形式的な指導で終わらず､その子どもの行動の裏側に隠された想いまで聴き取り､相互理解を深める指導を行うからこそ、モヤモヤを家まで持ち帰らせないことにつながっているのだろう。また、計画―実践―振り返りというサイクルも形にとどめず、こうしたプロセスでどのような資質・能力を子どもたちに育んでおり、今後の課題はどこにあるのかを明確にする話し合いや学級会が子ども集団を育てることになることを学んだことは、S 先生のさらなる成長の導きになるだろう。S 先生の教師としてのさらなる成長を祈念している。(船越)

５．O 先生の実践報告

堺市の小学校、この学校の 4 年 3 組(全 5 クラス)の担任をすることになる。特徴としては 2 年生で飛び出す子どもが多く、「めちゃくちゃな学年だった」と言われていた。そして 3 年生で 5 クラス全てを実力のある先生にして固めて、「落ち着いてきた」と言われてからのスタートだった。1 年目講師、5 年目女性教員、8 年目男性教員、16 年目女性教員、22 年目男性教員(音楽専科の女性の先生)の 5 人の配置だった。

4 月～7 月は一気に走り抜けた 1 学期だった。クラスを 1，2 週間ほど持ってみて、感じたことは学力が高いということ、トラブルがほとんど起きないということだった。マンション群の子どもたちは学力が高く、保護者も教育熱心な人たちが多い。しかし、一部の層はやはり勉強が難しく、中間層があまりいないという学力分布になった。

学級委員を選ぶときに男女6人ずつほどが立候補して、「いいクラスにしたい」と言ってくれることが多かった。積極性もあり、授業中もよく手を挙げてくれる。ただ人を助けるという方面に向いているかというと、少しそこには欠けてしまうと感じた。

音楽以外、週27コマほどを持っていて、教材研究が追い付かず、周りの先生に支えられる日々、ほとんど記憶がないくらい目まぐるしい日々だった

8月～12月は終わりの見えない2学期だった。2学期で起きた事件？は着目児Bが9月ごろから反抗的になったこと、授業中ひたすらにしゃべり、気に入らないことがあると「だまれ、なんでいうこと聞かなあかんねん」「何の意味があるん？もうだるい」などとわめく。指導に一貫性が持てず、授業規律が崩壊しかける。トラブル、特にグレーゾーンの子どもたちのトラブルが増加、こんなことを言われた、こんなことされたを互いに報告しに来る子どもたちに疲れ果てた。

着目児を2人あげる。

・着目児A

4月の引継ぎでトップで上がってきた。暴力的、3年生までクラスの子とトラブルになると殴る叩くなどを繰り返す。背景には父親があまり止めていない、そしてトラブルで電話するとかばう。4月～5月は手を出して黙っていたり、「こいつもやった」と主張することも。

「人に暴力を振ることは許さない」と繰り返しいい、いいところをとことん褒めた。授業でも机間巡視で手を挙げて参加すること、外遊びで積極的にかかわることを繰り返し、暴力をふるうと「Aのいいところたくさんあるのに、もったいないよ」と声をかける。

2学期に入ってからは暴力がかなり少なくなり、クラスでトラブルがあると「人にはできること、できないことそれぞれあるんやから、そんなに責めんなよ」とかばう声もあげた。この子には指導の実感を感じられた。

・着目児B

入学時トップ3に入る状態の女子だった。わがまま、気に入らないことには「意味がない」、また他人を見下す態度が目立った。3年生時、クラスの中心に、しかし今のクラスでは自分の考えが受け入れられないことがあり、不満が2学期に爆発した。授業中もおしゃべり、授業規律が通らなくなる。

対策として、見通しを持たせること、「これはだめだから次やったら注意する」、「これは昨日までと言っていたから今日は放課後するよ」を意識した。また、活躍する機会を与えた。人前でしゃべることが得意なので、決め事をするときに司会をすることを任せる、「司会うまかったなあ！助かった、ありがとう！」と声掛けをかけた。10・11月に比べると落ち着いたかな？と感じる12月だった。

色々な縁があってなった職業なので、子どもが好きかといわれると難しく、「向いてないかなあ、転職か、、、」と思うことが多かった。でも、自分を支えてくれる先生方や慕ってくれる子どもたち、いつもありがとうございますと言ってくださる保護者の方々の言葉に、やっててよかったなあと思うこともあった。３学期は授業をもう少し面白くできたらな、そして休みを大切にしたいと考えている。(尾崎)

６．O先生の実践へのコメント―学級づくりに何を求めていくのか―

O先生の実践報告から、学級づくりの軸となるものが何なのか。また、何を軸にすれば学級経営が上手くいくのだろうか。というについての試行錯誤が感じられた。日々の雑務や仕事に忙殺される毎日では、一つ立ち止まって考えることも難しく、ただ、がむしゃらにがんばっている様子が伝わってきた。そこで、まず第一歩として、生活面と授業面に分けて学級づくりをとらえていく必要性を説いた。

生活面での課題として、「高学年に見られる女子特有の荒れ」が大きくあった。この問題には、即効性の薬みたいなものはなく、ゆっくり子どもたちと時間をかけなければならないものではあるが、まずは「先生が認める」ことが非常に重要となることを伝えた。例えば女子の荒れにより、「だまれ」などと子どもに言われたとする。正直こちらも予想できていなければ、「うっ」と言葉につまり、苦し紛れに「誰に言ってんねん」「言い方間違えてるやろ」など、語気を強めて子どもに返しがちである。しかし、子どもたちも、そのような言葉で言うことが悪いのはわかっていることが多く、一度こちらが言葉を飲み込んで、「どうしたん？」や「そうやって腹立つのは、成長してる証拠やで。先生はうれしいわ」など、暴言を言ってしまう状況を認めつつ、正しい言葉に乗せ換えてあげることが必要であると話した。

授業面での課題として「特色が出せる（自分のストロングポイントとなる）教科の選択」を挙げた。面白い授業は魅力的である。しかし、先生の話が耳に入ってきやすく面白いのか、授業で学習が分かったから面白いのかというどちらを目指すのかということでも目指す授業の中身は全く変わってくる。前者であれば、人間味を前面に出し生活経験や生き方をみんなで紡ぐ学級づくりの中に、協力することで授業での面白さを見つけていくとい

う実践を研究することになるだろう。一方、後者なら、一つの教科を研究することで、他の教科にも汎用的に活かせる授業展開を見つけていくことで、自分なりの面白い授業の型を探していくことになるだろう。

実際私も一年目は必死についていき、生活指導では子どもたちの成長にとって何が大切か考えることができず、力だけで押さえつけていた。授業面も、ただこなすだけや、ただおもしろいだけの漫談のような授業をしていた。しかし、そこには限界があることも同時に知り、授業でも生活指導でも、自分のある程度の型を見つけることが必要だと強く感じた。今も完ぺきではなく、日々アップデートしながら少しずつ肩を変化させている。

今回の助言がＯ先生や、若手の先生、これから教員を目指す学生にとっての一助となれば幸いである。(中川)

三　来年度に向けて

同期の仲間の実践を聞きながら、自分も発表したいという声が出ている。来年度はそうしたメンバーや３月に卒業するゼミ生の報告も交えて活動ができればと考えている。３月に卒業する現４回生は、昨年度の中堅の先輩教員や今年度の１年上の先輩教員の報告と検討を聴いてきているので、それが自分たちの実践にどうつながっていくのか、ゼミ卒業生によるプロジェクトでの学び合いの意義を確かめるのも楽しみである。(船越)